

広島県立美術館

# 研究紀要

第25号

染織品の展示と方法について（2）

「令和3年度 秋の所蔵作品展 中央アジアの衣装と刺繍」の場合を中心に

…………… 福田 浩子・岡地 智子 1

中央アジアの刺繍布スザニについて（2）

令和3年度スザニ刺繍ワークショップ報告 …………… 福田 浩子 19

広島県立美術館蔵《伊万里色絵花卉文輪花鉢》の来歴調査報告 …………… 岡地 智子 27

2 0 2 2

BULLETIN  
OF  
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.25

The way of preparation and exhibition of textiles in Hiroshima Prefectural Art Museum: mainly the case of “Central Asian Embroidery and Costumes: # Handicrafts of the Bride’s Stories 2, from Collection Exhibition 2021 Autumn”. 1

**FUKUDA SIDDIQI, Hiroko & OKAJI, Satoko**

On Suzani, the embroidery cloth from Central Asia (2): Interim report of suzani embroidery workshop 19

**FUKUDA SIDDIQI, Hiroko**

Research report on provenance of 《Foliage bowl with floral design in Kakiemon-style》 in the HPAM Collection. 27

**OKAJI, Satoko**

2022

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM  
HIROSHIMA JAPAN



口絵1 重要文化財《伊万里色絵花卉文輪花鉢》17世紀後半 肥前 有田 高さ11.5 口径24.4 底径10.3cm



口絵2 重要文化財《伊万里色絵花卉文輪花鉢》高台内の刻銘

# 広島県立美術館蔵《伊万里色絵花卉文輪花鉢》の 来歴調査報告

岡地 智子

## 1 はじめに

広島県立美術館は1999（平成11）年に水野富士子氏より《伊万里色絵花卉文輪花鉢》（17世紀後半）（口絵1）をご寄贈いただいた。本作は肥前磁器の中でも輸出用の最高級色絵磁器として発展した柿右衛門様式の類品中特に作行の優れたものとして、1992（平成4）年に国の重要文化財に指定されている。造形、技術の高さとともに特筆すべきは外面底部の高台内に刻まれた「N：3□」の銘（口絵2）で、これはヨーロッパ最大の陶磁器収集家であったアウグスト強王のかつての収藏品であったことを示している。アウグスト強王コレクションは20世紀初頭に重複した作例を中心に交換や売却が行われ、また、第二次世界大戦後に旧ソ連軍に戦利品として没収され、1958年に返還されるも一部返還されないケースもあり、それらを機に散逸し世界に流出した。本稿では、本作がアウグスト強王コレクション以降当館の所蔵となるまでの来歴について、現在までに判明している情報を整理し、報告することとしたい。

## 2 アウグスト強王コレクション（1715年頃／1731年—？）

まず、アウグスト強王コレクションについて概略を記しておく<sup>i</sup>。アウグスト強王ことザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト一世（1670–1733、ポーランド王としてはアウグスト二世）が東洋磁器を収集した時期は1715年頃から1733年までとされる。購入先はオランダの貴族やドレスデンを訪れるフランスやオランダの商人か、ライプチヒのメッセを訪れるオランダの商人からであったという<sup>ii</sup>。

アウグスト強王は収集した磁器を展示するための城を建設することを構想し、1717年にドレスデンの居城付近の当時「オランダ宮」と呼ばれていた城を購入した。そして、これを改築して宮殿内部を磁器で装飾する計画をたてた。この城は1719年に「日本宮」と名付けられ、遅くとも1726年には改築工事が開始されるが、1733年にアウグスト強王が急逝すると計画半ばで中止となり、膨大な数の磁器は未完成の日本宮の地下に保管されることとなった。その後、これらの磁器は1876年にかつての王立ギャラリーであるヨハネウムに移され、前述の通り、戦後旧ソ連軍により運び出されるも1958年に一部が返還され、1962年に現在ドレスデン国立美術館磁器コレクション館<sup>iii</sup>と称されるツヴィンガー宮殿に移された。

i アウグスト強王の磁器コレクションについては、主に以下の文献を参照した。櫻庭美咲『西洋宮廷と日本輸出磁器-東西貿易の文化創造』、藝華書院、2014年、および、櫻庭美咲「神聖ローマ帝国諸侯の磁器陳列室にみる政治性と日本の表象—ブランデンブルク＝プロイセンおよびザクセンの事例を中心に—」『中近世陶磁器の考古学』第10巻、pp. 253-279、雄山閣、2019年。

ii 1717年にプロイセン王が所有する中国の青花磁器151点と交換にザクセンの竜騎兵600人を差し出したというエピソードがあるが、時に強引な方法でコレクションの拡充を図っている。

iii ドレスデン国立美術館磁器コレクション館には現在、約7,500点が伝世する。

アウグスト強王は収集した磁器の目録を2度作成させており、1721～1727年の目録には約2万7,000点、1779年の目録には3万9,000点もの磁器が記載され、その内容から、前者は約2万5,000点、後者は約2万9,500点が東洋製と推計されている<sup>iv</sup>。さらに、アウグスト強王は日本宮のために収集した作品の底面にも目録に記したのと同じ番号を書かせた。これはパレスナンバー *Palais Nummer* と呼ばれ、《伊万里色絵花卉文輪花鉢》の「N: 3□」がそれにあたる。アウグスト強王の旧蔵品は目録の記載と実際の作品をパレスナンバーにより照合でき、このパレスナンバーがアウグスト強王旧蔵の証となる。

さて、《伊万里色絵花卉文輪花鉢》にはマイセン製のほとんど完全な写し物が存在する(図1)。アウグスト強王は1710年にヨーロッパ初の磁器製作所である王立マイセン磁器製作所を設立したが、マイセンではアウグスト強王が日本宮のために収集した東洋磁器に基づく精密な写し物も製作された。現在ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館(以下V&Aと略)に収蔵されているこのマイセン製の鉢も高台内にパレスナンバー(図2)を持つアウグスト強王旧蔵品であり、《伊万里色絵花卉文輪花鉢》をモデルに製作されたと考えられる。この



図1 《色絵花卉文輪花鉢》1729～1731年 ドイツ マイセン  
高さ10.9 口径24.5cm  
ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館蔵

マイセン製の鉢の製作年は1729～1731年とされており<sup>v</sup>、したがって《伊万里色絵花卉文輪花鉢》がアウグスト強王コレクションに加わったのは1715年頃から1731年までの間と考えることができるだろう。

《伊万里色絵花卉文輪花鉢》がアウグスト強王コレクションを離れた明確な時期と経緯については確認できていない。なお、マイセン製の鉢は1860年にヴィクトリア女王からV&Aに寄贈されている。

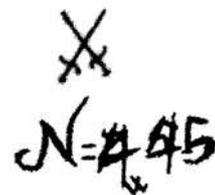


図2 図1《色絵花卉文輪花鉢》  
高台内の銘

### 3 デ・ラ・メア夫妻コレクション(?/1946年—1976年)

今のところ、アウグスト強王の次に《伊万里色絵花卉文輪花鉢》を所蔵していた人物として判っているのがイギリスのデ・ラ・メア夫妻である。夫のリチャード・デ・ラ・メア氏(1901-1986)は、優れた児童文学作家であるとともに幻想味豊かな怪奇小説の書き手としても知られるウォルター・デ・ラ・メア氏(1873-1956)の息子で、大手出版社フェイバー&フェイバーの会長を務めた人物である。前述のV&Aが所蔵するマイセン製の鉢と同様に、本作もイギリスに渡っていたことは興味深い。

デ・ラ・メア夫妻が所蔵していたことを示す文献資料のうち、最も古いと思われるのが月刊美術雑誌『アポロ』1946年12月号である。美術史家のヴィクター・リーナッカー氏がデ・ラ・メア夫妻の日

iv 櫻庭美咲 2019, p. 265.

v 製作年およびV&Aの所蔵経緯についてはV&Aのホームページを参照。<https://collections.vam.ac.uk/item/O277559/bowl-meissen-porcelain-factory/> (2022年1月31日最終閲覧)

本磁器コレクションを11月号、12月号と二号に渡って紹介したうちの後者に図版付きで掲載されている<sup>vi</sup>。図版キャプションには製作年、法量とともに高台内のパレスナンバーについての言及があり<sup>vii</sup>、これにより、遅くとも1946年にはデ・ラ・メア夫妻が本作を所蔵していたことがわかる。なお、リーナッカー氏はこのエッセイの目的について、歴史的にも重要で、技術的にも卓越した作品を紹介するよう務めたと最後に記しており<sup>viii</sup>、本作はそうした条件を満たす作品の一つとして選ばれたことがわかる。

デ・ラ・メア夫妻が《伊万里色絵花卉文輪花鉢》を売却した時期について記述する前に、掲載歴と出品歴についても紹介しておきたい。前述の『アポロ』1946年12月号の次に掲載を確認できたのが、英国東洋陶磁学会が1956年に開催した日本磁器展（会期：3月28日～4月28日）の展覧会カタログ<sup>ix</sup>である。展覧会には染付、鍋島焼、柿右衛門様式など、295点の肥前磁器が出品され、そのうち、《伊万里色絵花卉文輪花鉢》<sup>x</sup>を含む76点の図版がモノクロで掲載されている。図版キャプションには、やはり高台内のパレスナンバーについてと、所蔵者としてデ・ラ・メア夫妻の名が表記されている。ちなみに、この時デ・ラ・メア夫妻は全体のおよそ三分の一にあたる数の作品を出品している。なお、この展覧会は著名な学者であり蒐集家でもあったソーム・ジェニンス氏の着想に負うところが大きかったらしい<sup>xi</sup>。そして、その次に掲載を確認できたのが、このジェニンス氏の1965年の著作『日本磁器』である<sup>xii</sup>。本書は約300点の作品を参照しながら肥前磁器の編年や生産技術、様式分類などを紹介する解説書で、リチャード・デ・ラ・メア氏が会長を務めたフェイバー&フェイバー社から出版され、冒頭の献辞でリチャード・デ・ラ・メア氏に捧げられ、また、リチャード・デ・ラ・メア氏が序文を寄せている。序文では、本書が肥前磁器について英語で記された最初の完全な研究書であると信じているとしながら、ジェニンス氏の結論すべてに同意するわけではなく、例えば初期の有田焼と九谷焼の関係については高台と釉薬のさらなる比較研究が有益であると述べられており<sup>xiii</sup>、リチャード・デ・ラ・メア氏の考えが垣間見えて興味深い。本書でも、《伊万里色絵花卉文輪花鉢》は高台内のパレスナンバーについてと、所蔵者としてデ・ラ・メア夫妻の名が表記されている<sup>xiv</sup>。

さて、デ・ラ・メア夫妻が《伊万里色絵花卉文輪花鉢》を売却した時期については、サザビーズの売立目録から確認できる。デ・ラ・メア夫妻の72点の柿右衛門様式と鍋島焼が1976年6月2日、ロンドンの競売に付され、売却された<sup>xv</sup>。売立目録には72点の作品のうち55点の図版が掲載され、さらに

vi Victor Rienaeker, "The Richard De La Mare Collection of Japanese Ceramic Wares-Part II" *Apollo*, cember, 1946, pp. 149-153.

vii *Ibid.*, p. 151. (図版番号はVIII)

viii *Ibid.*, p. 153.

ix Oriental Ceramic Society, *Japanese Porcelain*, London, 1956.

x 《伊万里色絵花卉文輪花鉢》の出品番号はNo. 96.

xi 英国東洋陶磁学会編：西田宏子・弓場紀知監訳『宮廷の陶磁器 ヨーロッパを魅了した日本の芸術1650-1750』、同朋舎出版、1994年、p. 8。

xii R. Soame Jenyns, *Japanese Porcelain*, Faber and Faber, London, 1965.

xiii *Ibid.*, p. 7.

xiv *Ibid.*, pl. 61A.

xv *The Richard de La Mare Collection of Kakiemon and Nabeshima Porcelain*, Sotheby & Co, London, 1976.

そのうちの6点がカラーで掲載されている。《伊万里色絵花卉文輪花鉢》はカラー掲載のうちの1点で<sup>xvi</sup>、さらに、中表紙には売上の代表的な中身として7点の作品が列挙されているのだが、そのうちの一つに連ねられており<sup>xvii</sup>、競売の目玉作品の一つであったことがわかる。

#### 4 水野富士子氏（?—1999年）

デ・ラ・メア夫妻の次に《伊万里色絵花卉文輪花鉢》を所蔵していた人物として判っているのが、当館へ本作を寄贈して下さった水野富士子氏である。《伊万里色絵花卉文輪花鉢》が日本の書籍に掲載された最も早い例は、1977（昭和52）年刊行の『日本陶磁全集』<sup>xviii</sup>と思われるが、本作には所蔵先表記がない。また、その後も陶磁器に関する代表的な全集に掲載されてはいるのだが<sup>xix</sup>、いずれも所蔵先表記はないため、水野氏が本作を取得した時期と経緯について、明確な資料を見出すには至っていない。

#### おわりに

《伊万里色絵花卉文輪花鉢》はドイツからイギリスへと渡り、そして日本に里帰りした。イギリスのデ・ラ・メア夫妻旧蔵時代には、日本陶磁研究の重要な書籍や展覧会での紹介も少なくなく、欧米の人々に日本陶磁に対する興味を喚起するうえで重要な功績を果たしてきた1点とみなすことができる。

本作をめぐる今後の調査の課題としては、アウグスト強王の所蔵目録にあたり、入手経路と時期をより詳しく調べるとともに、来歴の空白を埋めていくことである。新知見への広がり期待しつつ、より詳しい調査を進めていきたい。

#### 【図版出典】

図1、2 英国東洋陶磁学会編：西田宏子・弓場紀知監訳『宮廷の陶磁器 ヨーロッパを魅了した日本の芸術1650-1750』、同朋舎出版、1994年、p. 193

（おかしさとこ／広島県立美術館学芸員）

xvi *Ibid.*, p. 20.

xvii *Ibid.*, p. 1.

xviii 西田宏子編『日本陶磁全集24 柿右衛門』、中央公論社、1977年、p. 26。

xix 例えば、座右宝刊行会編『世界陶磁全集8 江戸（三）』、小学館、1978年、pp. 48-49や、矢部良明『日本陶磁大系20 柿右衛門』、平凡社、1989年、p. 55など。